

二、五徳終始説

前章第二節で、劉向が説卦伝を用いて、従来と異なる五徳終始説を提唱したことについて考察した。劉歆も劉向同様、木徳伏羲氏から始まり、五行相生の順に徳運が進み、火徳の漢朝に至るといふ歴史観を唱えた。『漢書』律曆志には、『三統曆』に附随して「世経」が収録されており、これによって劉歆の五徳終始説の全貌を知ることができる。本節では、「世経」を分析し、劉歆の五徳終始説について考察する。

帝王の系譜

『漢書』卷二十一 下 律曆志下は、前半部で『三統曆』の計算方法を述べ、後半部で「世経」に基づいて過去の歴史を概述している。以下、「世経」部分から、歴代帝徳に関する部分を引用する。

太昊帝。易曰、炮犧氏之王天下也。言、炮犧繼天而王、爲百王先首。徳始於木、故爲帝太昊。作罔罟、以田漁、取犧牲、故天下號曰、炮犧氏。

太昊帝。『周易』（繫辭伝）に、「包犧氏が天下の王者となった時」とある。つまり、包犧氏が天から継承して王となり、最初の王となったということである。五行の徳は木から始まるので、帝太昊という。網を作り、狩や漁によって生贄を獲たので、天下の人々は包犧氏と呼んだ。

祭典曰、共工氏、伯九域。言、雖有水徳、在火木之間、非其序也。任知刑以疆、故伯而不王。秦以水徳、在周漢木火之間。周人懲其行序、故易不載。

『祭典』に、「共工氏が九州の覇者となった」とある（1）。つまり、共工氏は水徳を持っていたが、火・木の間の時期に君臨したので、帝徳の順序には合わなかったのである。知恵と刑罰によって強大になったので、覇者ではあったが王者ではなかった。秦も水徳で、周・漢の木・火の間に位置する。周の人は徳運の系譜から共工氏の順番を除いたので、『周易』では共工氏を掲載していない。

炎帝。易曰、炮犧氏没、神農氏作。言、共工伯而不王、雖有水徳、非其序也。以火承木、故爲炎帝。教民耕農、故天下號曰、神農氏。

炎帝。『周易』（繫辭伝）に、「炮犧氏が没して、神農氏が興隆した」とある。つまり、共工が覇者とはなかったが王者ではなく、水徳を持ちながら、帝徳の順序には当たらなかったため、神農氏が火徳によって木徳（太昊）を継いだということであり、そのために炎帝という。人々に農耕を教えたので、天下の人々は神農氏と呼んだ。

黄帝。易曰、神農氏没、黄帝氏作。火生土、故爲土徳。與炎帝之後、戰於阪泉、遂王天下。始垂衣裳、有軒冕之服、故天下號曰、軒轅氏。

黄帝。『周易』（繫辭伝）に、「神農氏が没して、黄帝氏が興隆した」とある。火が土を生むので、黄帝は土徳である。炎帝の後裔と阪泉の野で戦い、天下の王者となった。最初に「衣裳を長く垂らした」、つまり軒車に乗り冕服を身に着けたので、天下の人々は軒轅氏と呼んだ。

少昊帝。考徳曰、少昊曰清。清者、黄帝之子、清陽也、是其子孫、名摯立。土生金、故爲金徳、天下號曰金天氏。周興、摯已其樂、故易不載、序於行。

少昊帝。『考徳』に、「少昊は清という」とある。清とは黄帝の子、清陽のことである(2)。少昊帝はその子孫であり、名を摯という者が即位した。土は金を生むので、金徳であり、天下の人々は金天氏と呼んだ。周が興隆すると、その音楽を用いなかったので、『周易』では記載しない。帝徳には列せられる。

顓頊帝。春秋外傳曰、少昊之衰、九黎亂徳。顓頊受之、乃命重黎。蒼林昌意之子也。金生水、故爲水徳。天下號曰、高陽氏。周興、摯已其樂、故易不載、序於行。

顓頊帝。『国語』(楚語下)に、「少昊氏が衰えると、九黎が徳を乱した」
「顓頊が少昊氏を継ぎ、重・黎に命を下した(3)」とある。顓頊は、蒼林昌意の子である(4)。金は水を生むので、水徳である。天下の人々は高陽氏と呼んだ。周が興隆すると、その音楽を用いなかったので、『周易』では記載しない。帝徳には列せられる。

帝嚳。春秋外傳曰、顓頊之所建、帝嚳受之。清陽玄囂之孫也。水生木、故爲木徳。天下號曰、高辛氏。帝摯繼之、不知世數。周興、摯已其樂、故易不載。周人禘之。

帝嚳。『国語』(周語下)に、「顓頊が立てたものを、帝嚳が継承した」とある。帝嚳は、清陽玄囂の孫である。水は木を生むので、木徳である。天下の人々は、高辛氏と呼んだ。帝摯を継いだのだが、君臨した期間は

分らない。周が興隆すると、その音楽を用いなかったので、『周易』では記載しない。ただ、周人は嚳を禘した(5)。

唐帝。帝系曰、帝嚳四妃、陳豐生帝堯。封於唐蓋。高辛氏衰、天下歸之。木生火、故爲火徳。天下號曰陶唐氏。讓天下於虞、使子朱處於丹淵、爲諸侯。即位七十載。

唐帝。『帝系』に、「帝嚳の四人の妃、(その一人である)陳豐が帝堯を生んだ」とある(6)。堯は唐に封ぜられた。高辛氏が衰えた時に、天下が堯に帰服した。木は火を生むので、火徳である。天下の人々は陶唐氏と呼んだ。天下を虞に譲り、自分の子の朱を丹淵に置き、諸侯とした。七十年間即位した。

虞帝。帝系曰、顓頊生窮蟬、五世而生瞽叟、瞽叟生帝舜。處虞之鳩汭、堯嬪以天下。火生土、故爲土徳。天下號曰、有虞氏。讓天下於禹、使子商均爲諸侯。即位五十載。

虞帝。『帝系』に、「顓頊は窮蟬を生み、五世の後に瞽叟を生み、瞽叟が帝舜を生んだ」とある。虞の鳩汭におり、堯が天下を舜に譲った。火は土を生むので、土徳である。天下の人々は有虞氏と呼んだ。天下を禹に譲り、自分の子の商均を諸侯とした。五十年間即位した。

伯禹。帝系曰、顓頊五世而生鯀、鯀生禹。虞舜嬪以天下。土生金、故爲金徳。天下號曰夏后氏。繼世十七王、四百三十二歳。

伯禹。『帝系』に、「顓頊の五世の後に鯀を生み、鯀は禹を生んだ」とある。虞舜が禹に天下を譲った。土は金を生むので、禹は金徳である。天

下の人々は夏后氏と呼んだ。十七代、四百三十二年間続いた。

成湯。書經湯誓、湯伐夏桀。金生水、故為水德。天下號曰商、後曰殷。

成湯。『書經』湯誓に、湯が夏の桀を伐ったことが載っている。金は水を生むので、湯は水徳である。天下の人々は商と呼び、また後には殷と号した。

武王。書經牧誓、武王伐商紂。水生木、故為木徳。天下號曰周室。

武王。『書經』牧誓に、武王が商の紂を伐ったことが載っている。水は木を生むので、木徳である。天下の人々は周室と呼んだ。

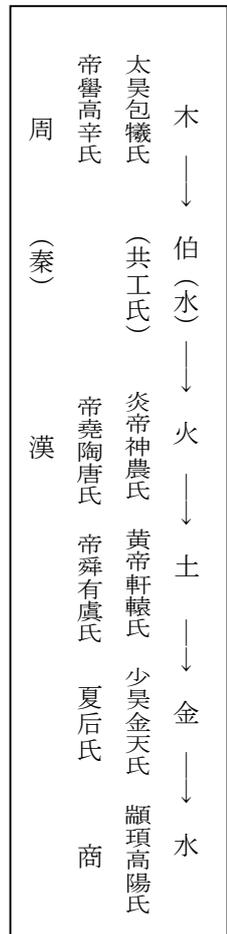
秦伯……(中略)……凡秦伯五世、四十九歳。

秦伯……(中略)……合計で秦伯は五代、四十九年間であった。

漢高祖皇帝、著紀。伐秦繼周、木生火、故為火徳。天下號曰漢。

漢の高祖皇帝については、本紀を参照。秦を伐つて周を継承した。木は火を生むので、火徳である。天下の人々は漢と呼んだ。

『周易』に基づいて最初の帝王を包犧氏とし、五行相生の順で帝王が推移するという点は、『漢書』郊祀志の紹介する「劉向父子」の説と同様である。以上の記述をまとめると、次のような系譜となる。



ただ、郊祀志の引く「劉向父子」説の特徴に加えて、以下の事柄が挙げられる。

- ・包犧氏を太昊氏と、神農氏を炎帝と同一視すること。
- ・包犧氏と神農氏、周と漢との間にそれぞれ共工氏・秦を置き、いずれも水徳の覇者とし、正規の五行相生の順に則った帝王とは認めないこと。
- ・黄帝と堯との間に少昊氏・顓頊・帝嚳を置くこと。

第一の特徴については、崔述が詳しく考察しているので、次節で取り上げる。

第二の特徴は、一般に「閏徳」と呼ばれる。まず、秦が水徳を称したこと(もしくは漢土徳説を主張する漢人たちによってそのように考えられたこと)は、第一章・第二章で取り上げた通りである。また、共工氏も、『淮南子』兵略訓に「炎帝為火災、故黄帝擒之。共工為水害、故顓頊誅之」とあるように、もともと水と関連する人物と認識されており、水徳を当てることに問題は無い。

しかし、秦が周・漢の間に位置するのは当然ながら、共工氏が包犧・神農の間に位置すると見なすことについては、議論の余地がある。例えば、『淮

南子』兵略訓によれば共工は顓頊と同時期の人物であり、『史記』五帝本紀では堯・舜の臣下とされ、いずれにしても神農より時代が下る。また、『国語』魯語上や『礼記』祭法では共工が覇者となったとされるが、その時代については明文が無い。

「世経」の中で、共工氏を包犧・神農の間に置く根拠として示されるのは、『左伝』昭公十七年の文である。以下、「世経」の論述である。

春秋昭公十七年、郟子來朝。傳曰、昭子問、少昊氏鳥名、何故。對曰、吾祖也、我知之矣。昔者、黃帝氏以雲紀、故為雲師而雲名。炎帝氏以火紀、故為火師而火名。共工氏以水紀、故為水師而水名。太昊氏以龍紀、故為龍師而龍名。我高祖少昊摯之立也、鳳鳥適至、故紀於鳥、為鳥師而鳥名。言、郟子據少昊受黃帝、黃帝受炎帝、炎帝受共工、共工受太昊、故先言黃帝、上及太昊。

『春秋』の昭公十七年に、「郟子が来朝した」とあり、『左伝』には、以下のようない記事がある。「昭子が『少昊氏が鳥の名を用いたのは何故か』と訊ねると、郟子は次のように答えた。『（少昊氏は）私の祖先であり、よく存じております。昔、黃帝氏は雲を範とし、そこで雲師を立て、官名は雲によって名づけました。炎帝氏は火を範とし、そこで火師を立て、官名は火によって名づけました。共工氏は水を範とし、そこで水師を立て、官名は水によって名づけました。太昊氏は龍を範とし、そこで龍師を立て、官名を龍によって名づけました。私たちの始祖少昊摯が即位した時、鳳鳥がやって来たので、鳥に範を取り、鳥師を立てて、官名を鳥によって名づけました』つまり、郟子は、少昊が黃帝を継ぎ、黃帝が炎帝を継ぎ、炎帝が共工を継ぎ、共工が太昊を継いだことから、まず黃

帝について述べ、それから太昊まで遡ったのだ。

『左伝』の中で、郟子は「黃帝・炎帝・共工・太昊・少昊」の順に過去の人物を挙げている。これは、劉歆によれば「先言黃帝、上及太昊」という。つまり左のように、郟子は「太昊→↓共工→↓炎帝→↓黃帝」について、左のように時間を遡って挙げたという。

時系列 …… 太昊→↓共工→↓炎帝→↓黃帝
郟子の挙げた順序…… 太昊→↑共工→↑炎帝→↑黃帝

このように、郟子が時間を遡って述べたと考えれば、共工氏は確かに太昊と炎帝の間に位置することになる。ただ、郟子がそのような述べ方をしたと考える根拠は『左伝』に見出せないし、そもそも年代順に述べたとは限らない。しかし、郟子が「太昊（↓共工）→↓炎帝→↓黃帝」の推移を述べたと解釈することは、月令が太昊を木、炎帝を火、黃帝を土に配当することと、五行相生による五徳終始モデルに、よく合致する。かつ、「太昊（木）→↓共工（水）→↓炎帝（火）」という徳運は、二周後の「周（木）→↓秦（水）→↓漢（火）」とも符合する。

第三の特徴である黃帝・堯の間の諸帝の列挙は、資料を総合した結果、可能になったと言える。顓頊を帝譽が継いだという関係は、『国語』周語下や『史記』五帝本紀に記述が見える。一方、『左伝』昭公十七年・『国語』楚語下には、少昊が天下に君臨し、その後に顓頊が王者となったという記載がある。これらを総合すれば、「少昊→↓顓頊→↓帝譽」という関係は、自然に導き出される。

ただ、問題は、劉歆が包犧・神農を黃帝の前に置く根拠として用いた『周

『易』繫辭伝下には少昊・顓頊・帝嚳の名が見えず、それどころか黄帝と堯・舜が連続する帝王であるかのように説いた、次の文言があることである。

包犧氏没、神農氏作……(中略)……神農氏没、黄帝・堯・舜氏作。

包犧氏が没し、神農氏が興隆した……(中略)……神農氏が没し、黄帝氏・堯氏・舜氏が興隆した。

この問題について、「世経」では、「嚳已其樂」と説明する。すなわち、周の人たちが少昊・顓頊・帝嚳の音楽を用いなかっただけに、『周易』では帝王の系譜に採らなかつたのである。このように、如何にも取ってつけたような釈明によって、『周易』との矛盾を回避している。こうした処理により、従来の五徳終始説が跳ばしていた三帝を(いずれも徳運としては「黄帝」の土徳に含まれていた)、「世経」ではそれぞれに別々の徳を当てながら、月令(少昊・顓頊をそれぞれ金・水に配当する)に符合する形で組み込んだのである。

突き詰めれば、「世経」の眼目は、第一に、太昊から顓頊に至る五帝を、月令と一致させたという点にあるだろう。『周易』繫辭伝の記載を用いることにより、黄帝より以前に二帝がいたことを示し、『左伝』や『国語』の文を組み合わせることで黄帝以後に少昊・顓頊が続いたという結論を導き出した。これにより「太昊(木) → 炎帝(火) → 黄帝(土) → 少昊(金) → 顓頊(水)」という、月令の配当そのままの帝王の系譜を作り上げたのである。また、第二の眼目として、共工・秦をいずれも覇者として扱うことにより、五行相生による帝徳の推移というモデルを崩さずに、木徳の太昊から火徳の漢に至るまでの系譜を整備したことが挙げられる。

ただ、この「世経」では、各帝王にまつわる瑞祥がほとんど述べられていない。強いて挙げれば、『左伝』の引文に、少昊氏の時に鳳凰が現れたと述べられるくらいで、それと少昊氏の金徳との関連は不明である。

そもそも鄒衍の五徳終始説は、五行相勝の順によって王朝の徳運が推移するということに加え、王者が興隆する際には瑞祥が現れ、その瑞祥によって五行の何に当たる徳かを知ることができるというものであった。文帝・武帝期の漢水徳説・漢土徳説の論争も、やはり瑞祥の有無が大きな論点となっていたし、『漢書』郊祀志に「劉向父子」として引かれる説も、漢朝の火徳について「赤帝の子(劉邦)が白帝の子を殺した」と泣く嫗の瑞祥を挙げている。しかし、この「世経」では「伐秦繼周、木生火、故爲火徳」等と、五行の推移を述べるのみである。

劉歆の関心は、『周易』や『左伝』『国語』といった経書の記載を用いて、月令に合致するように五徳終始説を整備することにあり、経書に記載されていない瑞祥をいちいち並べ立てて帝徳に符合させることは重要でなかつたのであろう。

崔述による批判

「世経」では、月令や『左伝』に見える太昊・炎帝と『周易』繫辭伝下に見える伏羲・神農を同一視し、それぞれに木徳と火徳を当てている。しかし、実はこの処理には無理があり、清代に崔述が詳しく論じ、的確な指摘をしている。ここでは、やや長くなるが崔述『補上古考信録』の論述を引用し、検証したい。

崔述はまず、『補上古考信録』巻上 前論にて、五帝に関する諸説について整理している。

三皇五帝之文見於周官、而其說各不同。呂氏春秋以黃帝・炎帝・太皞・少皞・顓頊爲五帝、蓋本春秋傳、而月令因之。大戴記以黃帝・顓頊・帝嚳・堯・舜爲五帝、蓋本之國語、而史記因之。至三統歷、則又以包羲・神農・黃帝・堯・舜爲五帝、其說以易傳爲據。

三皇・五帝についての文は、『周官』に見えるが(7)、具体的な内容については各説で異なる。『呂氏春秋』は黃帝・炎帝・太皞・少皞・顓頊を五帝とする。これは『春秋左氏伝』に基づいたからであり、そして月令がこれに拠った。『大戴礼記』は黃帝・顓頊・帝嚳・堯・舜を五帝とする。これは『国語』に基づいたからであり、そして『史記』がこれに拠った。『三統歷』に至って、今度は包羲・神農・黃帝・堯・舜を五帝とした。この説は『周易』繫辭伝に依拠している。

まず第一の系統として挙げられる黃帝・炎帝・太皞・少皞・顓頊を五帝とする説は、崔述によれば『左伝』に基づくという。すなわち、昭公十七年の次の文である。

郊子曰、吾祖也、我知之。昔者、黃帝氏以雲紀、故爲雲師而雲名。炎帝氏以火紀、故爲火師而火名。共工氏以水紀、故爲水師而水名。大皞氏以龍紀、故爲龍師而龍名。我高祖少皞摯之立也、鳳鳥適至、故紀於鳥、爲鳥師而鳥名……(中略)……自顓頊以來、不能紀遠、乃紀於近、爲民師而命以民事、則不能故也。

郊子は次のように答えた。「(少皞氏は)私の祖先であり、よく存じております。昔、黃帝氏は雲を範とし、そこで雲師を立て、官名は雲によつ

て名づけました。炎帝氏は火を範とし、そこで火師を立て、官名は火によつて名づけました。共工氏は水を範とし、そこで水師を立て、官名は水によつて名づけました。大皞氏は龍を範とし、そこで龍師を立て、官名を龍によつて名づけました。私たちの始祖少皞摯が即位した時、鳳鳥がやつて来たので、鳥に範を取り、鳥師を立て、官名を鳥によつて名づけました……(中略)……顓頊以降は、遠くのものから範を取ることが出来ず、卑近なものから範を取ったので、民師を立て、人々に関する事によつて名づけました。つまり、かつてのようにはできなかったのです」

ここでは、古代の帝王として黃帝・炎帝・共工・太皞・少皞・顓頊が順に挙げられており、共工を除いた五者が、『呂氏春秋』十二紀や『礼記』月令が各季節・各方角の「帝」として掲げる五者と一致する。

また、第二の系統である黃帝・顓頊・帝嚳・堯・舜の五帝は、『大戴礼記』五帝徳に見える。

宰我問于孔子曰、昔者子聞諸榮伊、言黃帝三百年。請問黃帝者人邪、抑非人邪。何以至于三百年乎……(中略)……孔子曰、黃帝、少典之子也、曰軒轅……(中略)……以與赤帝戰于阪泉之野、三戰、然後得行其志……(中略)……宰我曰、請問帝顓頊……(中略)……孔子曰、顓頊、黃帝之孫、昌意之子也、曰高陽……(中略)……宰我曰、請問帝嚳。孔子曰、玄囂之孫、驩極之子也、曰高辛……(中略)……宰我曰、請問帝堯。孔子曰、高辛之子也、曰放勳……(中略)……流共工于幽州、以變北狄。放驩兜于崇山、以變南蠻……(中略)……宰我曰、請問帝舜。孔子曰、驩牛之孫、瞽瞍之子也、曰重華……(中略)……宰我曰、請問禹。

孔子曰、高陽之孫、鯀之子也、曰文命……

宰我が孔子に訊ねて言った。「以前、私は榮伊から『黄帝は三百年続いた』と聞きました。黄帝というのは人なのでしょうか、人ではないのでしょうか。どうして三百年も生きていられたのでしょうか」……(中略)……孔子は次のように答えた。「黄帝は、少典の子であり、名を軒轅という……(中略)……赤帝と阪泉の野にて戦い、三戦して、その目的を達することができた……」宰我は「帝顓頊についてお教え下さい」と言った……(中略)……孔子は次のように答えた。「顓頊は黄帝の孫で、昌意の子であり、名を高陽という……」宰我は「帝嚳についてお教え下さい」と言った。孔子は、次のように答えた「玄囂の孫、蟠極の子であり、名を高辛という……」宰我は「帝堯についてお教え下さい」と言った。孔子は次のように答えた。「高辛の子であり、名を放勳という……(中略)……共工を幽州に流刑し、共工は北狄となった。驩兜を崇山に放逐し、驩兜は南蛮となった……」宰我は「帝舜についてお教え下さい」と言った。孔子は次のように答えた。「禹についてお教え下さい」と言った。孔子は華という……」宰我は「禹についてお教え下さい」と言った。孔子は次のように答えた。「高陽の孫、鯀の子であり、名を文命という……」

これは『史記』卷一 五帝本紀に掲げられる五帝と一致する。また、崔述によれば、これは『国語』に基づくという。すなわち、魯語上に見える次の言のことであろう。

昔烈山氏之有天下也、其子曰柱、能殖百穀百蔬。夏之興也、周棄繼之、故祀以爲稷。共工氏之伯九有也、其子曰后土、能平九土、故祀以爲社。黄帝能成命百物、以明民共財、顓頊能

修之。帝嚳能序三辰、以固民。堯能單均刑法、以儀民。舜勤民事而野死。鯀鄣洪水而殛死、禹能以德修鯀之功……(中略)……故有虞氏禘黄帝而祖顓頊、郊堯而宗舜。夏后氏禘黄帝而祖顓頊、郊鯀而宗禹。商人禘嚳而祖契、郊冥而宗湯。周人禘嚳而郊稷、祖文王而宗武王。

昔、烈山氏が天下を治めた時に、烈山氏の子に柱という者がおり、百穀・百蔬を栽培しました。また、夏王朝が建てられると、周の棄がこの職を継ぎました。そのために、彼らを祀つて稷としました。共工氏が九州の覇者となった時、共工氏の后土という子が九州の土地を整備しました。そのために、彼を祀つて社としました。黄帝は万物に名づけ、人々にそれを教えて共有させました。そして、顓頊がその業をよく修めたのです。帝嚳は三辰の運行法則をよく調べ、人々を安定させました。堯は刑・法を整備し、人々を正した。舜は下々のことに従事し、野に死にました。鯀は洪水を塞ごうとして刑死しましたが、禹が徳によつて鯀の功績を完成させました……(中略)……そこで、有虞氏は黄帝を禘して顓頊を祖とし、堯を郊して舜を宗としました。夏后氏は黄帝を禘して顓頊を祖とし、鯀を郊して禹を宗としました。商人は嚳を禘して契を祖とし、冥を郊して湯を宗としました。周人は嚳を禘して稷を郊し、文王を祖として武王を宗としました。

果たして本当に月令が『左伝』に基づき、『大戴礼記』と『史記』が『国語』に基づいているかは定かではない(8)。ただ、これらの二つの組の間で、帝王の内訳の傾向には確かに差異がある。前者には帝嚳の名が見えず、後者には太皞が見えない。

崔述は、これらに『周易』繫辭伝に見える包羲氏・神農氏を加え、上古の

帝王を「包羲氏→神農氏→黄帝氏→炎帝氏→共工氏→太皞氏→少皞氏→顓頊氏→帝嚳氏」とまとめる。このように整然とまとめることは是非ともかくとして、少なくとも『周易』・『左伝』・『大戴礼記』に見える帝系を、それらの文言通りの順序で繋ぎ合わせれば(9)、このようになる。つまり、炎帝・共工・太皞は黄帝よりも後と考えることになる。

『補上古考信録』巻下 炎帝の項では、更に詳しく、包羲・神農と太皞・炎帝とが別人であり、劉歆説が成り立たないことを論じている。

漢書律曆志以炎帝爲神農氏、太皞爲包羲氏。後之學者編纂古史、皆遵之無異詞。以余考之、不然。易傳曰、庖羲氏没、神農氏作。神農氏没、黄帝・堯・舜氏作。是庖羲・神農在黄帝之前也。春秋傳曰、黄帝氏以雲紀、故爲雲師而雲名。炎帝氏以火紀、故爲火師而火名。共工氏以水紀、故爲水師而水名。太皞氏以龍紀、故爲龍師而龍名。是炎帝・太皞在黄帝之後也。庖羲・神農在黄帝之前、炎帝・太皞在黄帝之後、然則庖羲氏之非太皞、神農氏之非炎帝也、明矣。

『漢書』律曆志では、炎帝を神農氏とし、太皞を包羲氏と見なしている。後の学者が古史を編纂する際には、いずれもこの説に従い、異説を唱えていない。しかし、私が考えるには、この説は正しくない。繫辞伝に、「庖羲氏が没し、神農氏が興隆した」「神農氏が没し、黄帝・堯・舜氏が興隆した」と言う。つまり、庖羲・神農は黄帝より前である。一方、『左伝』では、「黄帝氏は雲を範とし、そこで雲師を立て、官名は雲によって名づけました。炎帝氏は火を範とし、そこで火師を立て、官名は火によって名づけました。共工氏は水を範とし、そこで水師を立て、官名は水によって名づけました。大皞氏は龍を範とし、そこで龍師を立て、

官名を龍によって名づけました」とある。つまり、炎帝・太皞は黄帝より後である。庖羲・神農は黄帝より前であり、炎帝・太皞は黄帝より後であるのだから、庖羲氏が太皞ではなく、神農氏が炎帝ではないことは、明らかであろう。

すなわち、『左伝』昭公十七年の文言をそのまま読めば、「黄帝氏→炎帝氏→共工氏→太皞氏→少皞氏」となり、ここでの太皞・炎帝と、繫辞伝が黄帝以前の帝王として挙げる包羲・神農とは時期が一致しない。

更に、『史記』の記述からも、神農と炎帝とが別人であることが窺えるという。

史記五帝本紀曰、軒轅之時、神農氏世衰、諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。又曰、炎帝欲侵陵諸侯、諸侯・軒轅乃脩德振兵、以與炎帝戰於阪泉之野、三戰然後得其志。夫神農氏既不能征諸侯矣、又安能侵陵諸侯。既云世衰矣、又何待三戰然後得志乎。且前文言衰弱、凡兩稱神農氏、皆不言炎帝。後文言征戰、凡兩稱炎帝、皆不言神農氏。然則與黄帝戰者自炎帝、與神農氏無涉也。其後又云、諸侯咸尊軒轅、爲天子代神農氏、又不言炎帝。然則帝於黄帝之前者自神農氏、與炎帝無涉也。封禪書云、古者封泰山禪梁父者七十二家、而夷吾所記者十有二焉。昔無懷氏封泰山禪云云、處義封泰山禪云云、神農封泰山禪云云、炎帝封泰山禪云云。夫十有二家中、既有神農、復有炎帝、其爲二人明甚、焉得以炎帝爲神農氏也哉。『史記』五帝本紀には、次のように言う。「軒轅が生きた時代は、神農氏の治世が衰え、諸侯同士が戦争し、人々を苦しめていたのだが、神農

氏はそれを征伐することができなかった」「炎帝が諸侯を侵略しようとしていたので、そこで諸侯と軒轅が徳を治めて兵を起こし、そして炎帝と阪泉の野で戦い、三回戦った後に目的を達成した」そもそも神農氏が最早諸侯を征伐することができなかったというのに、そこでどうして諸侯を侵略することができよう。また、神農氏の治世が衰えたというのに、それでどうして三回も戦って、それでようやく目的を達せられたということがあろうか。そして、前文で「衰えた」と言っている対象は、いずれも「神農氏」と書いており、「炎帝」とは言っていない。後の文で「戦った」と言っている対象は、いずれも「炎帝」と書いており、「神農氏」とは言っていない。そうすると、黄帝が戦ったのは炎帝ということであり、神農氏とは関係無いのだ。その後ではまた、「諸侯がいずれも軒轅を重んじたので、神農氏に代わって天子となった」というところでも、「炎帝」とは言っていない。そうすると、黄帝より前に帝であったのは神農氏であって、炎帝とは関係ない。封禅書では、次のように言う。「古代に泰山・梁父で封禅を行なったのは七十二家あり、管仲はそのうちの十二を記録している。『昔、無懷氏が泰山で封を行い、云云で禅を行い、慮義が泰山で封を行い云云で禅を行い、神農が泰山で封を行い云云で禅を行い、炎帝が泰山で封を行い云云で禅を行い……』」この十二家のうちに、神農が挙げられ、更に炎帝も挙げられており、彼らが別々の二人であることは非常に明らかである。どうして、炎帝を神農氏と見なすことができようか。

また、その他の文献を見ても、炎帝と神農とを同一人物として扱う例が見当たらない。

戦国策曰、神農伐補遂、黄帝伐涿鹿而禽蚩尤。亦列神農於黄帝前、而不云炎帝。晉語曰、黄帝以姬水成、炎帝以姜水成。亦列炎帝於黄帝後、而不云神農。春秋傳云、炎帝爲火師、姜姓其後也、與國語炎帝姜姓之說合。皆云炎帝、不云神農……（中略）……蓋自史記以前、未有言庖羲風姓爲龍師、神農姜姓爲火師者。亦未有言太皞畫八卦作網罟、炎帝制耜爲市廛。然則庖羲氏之非太皞、神農氏之非炎帝也、明矣。

『戦国策』秦策に、「神農は補遂を討ち、黄帝は涿鹿で戦って蚩尤を捕えました」とあり、これも神農を黄帝より前に並べ、そして「炎帝」とは呼んでいない。『国語』晋語には、「黄帝は姬水にて興隆し、炎帝は姜水にて興隆しました」とあり、これもまた炎帝を黄帝より後に置き、そして「神農」とは呼んでいない。『左伝』哀公九年に、「炎帝は火師を立てました。姜姓はその後裔でございます」と言う。これは、『国語』が炎帝を姜姓という説と合致する。いずれも「炎帝」と言い、「神農」とは言わない……（中略）……『史記』以前には、庖羲が風姓で龍師を立てたとか、神農が姜姓で火師を立てたとかと言う説は無かった。また、太皞が八卦を描いて網を作ったとか、炎帝が農具を作って市場を定めたとかと言う説も無い。つまり、庖羲氏が太皞ではなく、神農氏が炎帝ではないのは、明らかである。

そして、劉歆が太皞を包羲氏と、炎帝を神農氏と同一視したのは、帝王の系譜と月令の配当とを一致させるために行なった処理だったと推理する。

自戦國以後、陰陽之術興、始以五行分配五帝、而呂氏春秋采之、月令又述之、遂以太皞爲木爲春、炎帝爲火爲夏、少皞爲

金爲秋、顓頊爲水爲冬、黃帝爲土爲中央。然亦但言其德各有所主、不謂太皞先於炎帝、炎帝先於黃帝也。宣元以後、讖緯之學日盛、劉歆不考其詳、遂以五行相生之序爲五帝先後之序、而太皞遂反前於炎帝、炎帝遂反前於黃帝矣。然考之易傳、前乎黃帝者爲庖羲・神農、其名不符。考之春秋傳、炎帝・太皞皆有黃帝之後、其世次又不合。於是、不得已謂太皞即庖羲氏、炎帝即神農氏、而春秋傳文爲逆數、謂少皞受黃帝、黃帝受炎帝、炎帝受共工、共工受太皞、故先言黃帝、上及太皞也。

戰國時代以後に陰陽の術が興隆し、この時期になってようやく、五行に五帝を配当するようになった。『呂氏春秋』がこの説を採り、月令もまたそれに従い、こうして、太皞を木・春に当て、炎帝を火・夏に当て、少皞を金・秋に当て、顓頊を水・冬に当て、黃帝を土・中央に当てるようになった。しかし、これもまた、それぞれの徳が司る季節・方位を述べたに過ぎず、太皞が炎帝よりも前だとか、炎帝が黃帝よりも前の帝王だとかといったことを言っているのではない。宣帝・元帝期以後に、讖緯の学がどんどんと盛んになり、劉歆はよく考えずに、五行相生の順序を五帝の時代の先後と見なしてしまった。こうして、太皞は本来とは逆に炎帝より前となり、炎帝は本来と逆に黃帝より前となった。しかし、説卦伝に拠って考えれば、黃帝より前は庖羲・神農であり、名前が符合しない。『左伝』に拠って考えれば、炎帝・太皞はいずれも黃帝より後であり、世代の順序が符合しない。そこで、劉歆はやむを得ず、太皞が庖羲氏であり、炎帝が神農氏であるとして、『左伝』の文言を時代を遡る順に記述したものと見なした。そこで、劉歆は、「少皞が黃帝を継ぎ、黃帝が炎帝を継ぎ、炎帝が共工を継ぎ、共工が太皞を継いだので、（郊子は）まず黃帝を述べ、そこから遡って太皞に言及した」と言ったのだ。

以上の崔述の説は、劉歆説の問題を的確に指摘している。また月令の配当が本来は歴史上の順序を示してはいないというのも、妥当な見解である。

それでは、劉歆が無理な解釈・操作を行ってまで、帝王交代史と各季節・各方位の五帝とを一致させようとしたのは、何故だったのであろうか。顧頤剛氏は、新朝の正統性を主張するための措置だったと見なすが(10)、筆者はそのようには考えない。帝王の名であれば、諸書を探せば他にいくらでも見出すことができ(11)、何も無理に炎帝と神農氏を同一人物にしなくても、「包羲(木徳)――↓……………↓堯(火徳)――↓舜(土徳)――↓……………↓漢(火徳)――↓新(土徳)」という系譜にすることは可能だったはずである。それにも拘らず、このような処理を行なったのは、やはり月令との符合を目指したからであろう。

前節で考察した通り、劉歆は月令による配当に基づいて、『洪範五行伝』を改造している。そして、本節で示したように、また五徳終始説も、月令に符合させるように改造している。このように、月令との符合は、非常に重要なことだったのである。

……………

劉歆は、劉向同様に『周易』説卦伝・繫辭伝に基づき、木徳伏義氏から五行相生によって徳運が遷り変わる五徳終始説を唱えた。そして、その内訳は明らかに月令の配当に則っている。更には、月令と一致させるために、太皞を伏義と、炎帝を神農と同一視するという、やや無理な処理まで行った。

処々で『周易』との符合を主張しながら、全体的に見れば月令との合致を図ったことは明らかであり、この点で『洪範五行伝』の改造とも共通する。すなわち、いずれに於いても、劉歆は、月令に基づいて事物の五行への配当

を統一し、如何なる話題（帝徳・災異等）であろうとも、同一の事物に対しては同一の配当がなされるように、試みたのである。

劉歆は、『明堂陰陽』を六芸略に著録しており（12）、明堂月令を経学の一角として認めていた。そして、平帝期には王莽の力に拠って『古文尚書』『毛詩』『周礼』等と共に月令についての博士官を立て（13）、また自身も義和となり、明堂を治め（14）、そして広く月令を頒布した（15）。これらのことから、劉歆が月令を重視したことは明らかである。

月令は、時間と空間とを関連付け、天地人に於ける非常に多くの事物を五行に配当する。つまり、自身の立説に文献的根拠を見出そうとした場合に、豊富な明証を提供し得る文献である。劉歆はこの月令を、神々の祭祀から人々の生活に至るまでのあらゆる事柄を整理して秩序付ける手段として、諸経学の中でも最も適した文献と見なしたのではなからうか（16）。そのために、劉歆はこのように月令によって諸五行説を改造し、体系化したのであろう。

それでは、月令に基づいて五行説を体系化した劉歆にとって、易は如何なる位置付けに在ったのか。五行の配当に於いて月令が規範として用いられる一方で、易説は一見すると補助的にしか用いられていない。

しかし、劉歆の思想に於いて、易は決して低い位置付けに在ったのではなく、むしろ五行よりも高次の抽象的・根源的な原理として君臨していた。次節では、劉歆の律曆思想を題材に、それを論じる。